

## ●春日部市民文化講座（第13回）

◆日 時：2014年10月8日(水)10時（ぼぼら春日部4階会議室）～11時

◆テ ー マ：講演「春日部のマンモスハンターと縄文人の暮らし」

講師：中野 達也さん（春日部市文化財保護課長）

◆ゲスト紹介：1964年、埼玉県蕨市生まれ。さいたま市在住。1987年、明治大学文学部史学地理学科卒業。卒論作成の資料収集に際して「花積貝塚」の出土遺物に出会い、春日部市とのかかわりが生まれる。1993年、春日部市役所に学芸員として奉職、現在まで約120件の発掘調査の担当者として、埋蔵文化財の記録保存に従事する。2012年、教育委員会文化財保護課長に着任、現在に至る。旧石器時代から縄文時代早期の石器や土器の交流と流通に関するスペシャリストで、市民のために土器作り体験を指導されている。



## ■春日部のマンモスハンターと縄文人の暮らし

春日部にはマンモスハンターがいました、今から3万年くらい前の旧石器時代のお話から始めさせていただきます。この時代の人々の代名詞は「旧石器人」という言い方の他に「マンモスハンター」という言い方をします。当時は地球の寒冷期、氷河期にありましたので、今で絶滅してしまったマンモス、ナウマン象、オオツノジカといった動物を追い求めた人たちの暮らしを知っていただこうということで、こういったタイトルを付けました。

## ■マンモスハンターの暮らし

マンモスハンターの頃というのは約2万年前の頃です。この時代は、温暖化の時代に比べて気温が2～6度下がりました。また、海面が下がったことにより大陸と陸続きになり、ナウマン象、オオツノジカ、マンモスがこの付近を闊歩するようになりました。身近な所では、田端駅の構内や日本橋付近でもナウマン象の骨が発見されています。こうしたことから考えますと、春日部市内でもナウマン象がいたのではないかと想像できます。ただ、生息区域はかなり限られています。ヒグマについても、現在は北海道や東北地方の一部ですが、当時は四国付近までいました。静岡以北にはヘラジカがいたので、この辺りにはヘラジカやナウマン象がいました。これらが、彼らの主な食料資源になっていたようです。彼らがどんな暮らしをしていたのかなという、一年中狩り主体の生活でした。秋になりますと、ごく僅かな木の実を採取したり、夏には北海道で見られるようなコケモモやキイチゴなどを食していたというような生活が窺われます。必ずしも肉ばかりを食べていたわけではなく、自然の恩恵を受けて暮らしていた様子が窺われます。集団で狩りをしていかないと食料資源の獲得ができませんので、小規模な集団によって生活が営まれていた様子が窺われます。旧石器時代は住居を造らないと言われていたのですが、この10年余りの発掘調査の中で資料が増えてきております。15年ほど前、大阪市の建築現場で発掘をしたところ、竪穴式に近いような住居の一部が発掘されました。それ以降、神奈川県では柱の一部が見つかったり、この写真では点々と石器の破片が残っていますが、直径100m程度で円を描くように発掘された事例も3万年前の地層から見られていまして、おそらく集落があったのではないかと思います。集団でヘラジカを追いかけて囲い猟をしていました。ナウマン象を落とし穴に追い込んで狩りをしていました。



## ■春日部のマンモスハンターたち

春日部市内では103箇所の遺跡があります。そのうちの13遺跡で旧石器時代のナイフ形石器などが見つかっています。そこそこ小規模な集団が道具を携えて移動していた様子が窺えます。市内の遺跡に残されている石器などを見ていきますと、遠方とのネットワークが確立していき、便利な材料を手にするために多くの村々を介して暮らしていたことが分かります。

## ■縄文時代の暮らし

縄文時代になると、神津島からの石が春日部市域に多く入るようになっていきます。縄文時代になると海水面が上昇して内陸まで海が入っていましたので、舟を使わないと房総半島まで行き着かないのです。旧石器時代に少なかった長野県のもが増えてきます。諏訪湖周辺ですね。一方、旧石器時代にありました高原山からは頂くことができなくなりました。縄文時代になりますと、旧石器時代と大きく違う点は、住居を作って定住します。それから土器を作ります。こういったことが新たに加わってくることで、囲炉裏です。火をずっと焚くことによって、煮炊きが進歩します。旧石器時代では石蒸し調理だったので、僅かな痕跡しか遺っていないのですが、縄文時代になると囲炉裏がしっかりし、長期間の使用のため土が赤く遺るといった違いがあります。

中野さんのお話はまだまだ続くのですが、私たち人間のルーツを探っていく旅はロマン溢れますね。